



# 受け止めることができた死

〈大阪府〉 藤井正恵 （まほえ）  
66歳

夜中の携帯音に、飛び起きた。緩和ケア病棟からだ。

（義兄が危ない）

病室のドアを開けた。看護師さんが、姉の肩をしっかりと抱いているのが目に入った。2人で、死の時を過ぎたことがすぐに分かった。姉の目が真っ赤だった。午後9時、姉はいつもと違う呼吸に看護師さんをお呼びした。このとき、看護師さんは、死

の時が来たかと思ったに違いない。たくさんの写真が残されていた。姉が義兄の頬をなでる写真、Vサインする義兄の姿もあった。呼吸は、急速に顎をゆっくり動かす下顎呼吸に変わった。うろたえる姉を見た看護師さんは、義兄の腕に点滴をした。（いま点滴をしてもらいました。）

もう大丈夫

姉からのメールで、点滴が看護師さんの姉への優しさだったことを知った。義兄の75年が終わった。

姉夫婦は、ろうあ者だ。その上、義兄には認知症があった。耳が聞こえない2人には、耳から自然に入り知識となり得る言葉がほとんどない。痛みの程度、どんな痛さか、全てを「痛い」と表現する。

看護師さんは、さまざまな痛さの度合いの絵を作り、指さす方法を考えた。しかし、その絵の出番はほとんどなかった。身ぶり手ぶりで十分伝わった。必死で伝えようとする看護師さんの姿に、義兄はおなかを抱えて笑うこともあった。同じ言葉ばかり繰り返していたが、「ありがと

う」「おいしい」「妻が一番好き」と手話で何度も言う姿が忘れられない。

看護師さんと私たちが送り支度をした。パンパンに腫れた足からパジャマを脱がすときの看護師さんの手の優しさに涙が出た。そつと。そつと。そして痛くないようガーゼを巻いてくれた。ゆっくり流れる時間は私たちを落ち着かせた。

終わる命をこんなにも大切に思い看護してくださった看護師さんに出会い、心が休まる思いだった。私たちは、義兄の死をしっかりと受け止めることができた。